



『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿--第六帖(5) : 菊～紫苑

著者	福田 智子, 青木 聡美, 桐谷 早織, 浅井 佐和子, 穂満 建等
雑誌名	文化情報学
巻	7
号	2
ページ	70-54
発行年	2012-03-31
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013128

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖(5) 菊・紫苑―

福田 智子・青木 聡美・桐谷 早織
浅井 佐和子・穂満 建等

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、菊・桔梗・竜胆・紫苑の題に配されている出典未詳歌、十一首について注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、出典考証をもとに、出典未詳歌について注釈を加えるものである。
 - 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。
 - 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
 - 四、本文は、歴史的仮名遣いに統一し、踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を()に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。
 - 五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。
- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
 - 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
 - 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
 - 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(江)
 - 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
 - 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
 - 和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵(最近の調査では所蔵の形跡なし：筆者注) 田林義信氏旧蔵本 略称(紀)
 - ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)

○寛文九年版本

略称(寛)

なお、諸本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和歌六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月)所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料
(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

注釈

三七三六(きく)

【本文】

おなじ

月影もはなもひとつにみゆるよはいづれを分きてをらんとぞ思ふ

【校異】○月影も―月かけに(永)○はなもひとつに―はなひとつに(林)

【語釈】○月影 月の光。月あかり。○はな ここでは白菊を指す(『考察』参照)。○ひとつ 月の光と花の色が、あたかも単一のもののよ

うに同じ状態であること。○分きて「分く」は、違いを識別する、判別する意。

【通釈】

月の光も花も、あたかも同じもののように見分けがつかなくなる夜は、いったいどれを(白菊と)判別して手折ろうかと思う。

【他出】なし

【考察】

白菊が月光と見分けが付かないという歌は、「心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花」(古今集・秋下・二七七・凡河内みつね・しらぎくの花をよめる)という例をはじめ、「つきかげにいろわきがたきしらぎくはをりてもをらぬこちこそすれ」(躬恒集・一三七)、「いづれをか花とはわかむ長月の有明の月にまがふ白菊」(貫之集・一〇二・九月)、「色そめぬものならねども月影のうつれる宿の白菊のはな」(貫之集・一二四・月のもとものしらぎく)、「かをらずはをりやまどまむながづきの月よにあへるしらぎくのはな」(能宣集・二四〇・九月十余日ばかりの月に、まへちかききくのいとおもしろくみえわたりはべれば)、「うつろはばことに見えまししらぎくのいろにかはらぬ冬の夜の月」(書陵部蔵(五二〇・一二)中務集・一一三・月のあかきよ、菊の花さかりなり)など、古今集時代から散見される。特に冒頭の『古今集』歌は、後世に大きな影響を与えており、当該歌もこれと同様の発想で詠まれている。

ただし、月影の白のイメージは、他の白い花にも重ねられることがあり、「いづれをかわきてをらまじうのはなのさけるかきねにてらす月影」(清正集・一五・人のいへにまへなるこしばがきに、いとしろううのは

なさきかかりたり、月よに、「つきかげのおなじいろなるむめのはないるともをりてみつべかりけり」(中務集・二二二)という例では、卯の花や白梅が採り上げられている。

『古今六帖』の菊題の歌は全部で三十八首あるが、当該歌のように、菊を指して「はな」と表現した歌は、他に「うゑしうゑば秋なきときやさかざらん花こそちらめねさへかれめや」(三七三二)がある。『古今集』二六八番、『伊勢物語』第五十一段に載る有名な業平歌であり、「人のせんだいにきくにむすびつけてうゑけるうた」(『古今集』二六八番詞書)という状況は、『古今六帖』成立時においても、よく知られていたことであろう。当該歌にも、「はな」が菊を指すことを明記する詠歌状況が、『古今六帖』に収められる前段階においては、付されていた可能性があらう。

「はなもひとつに」という句は、まず、『近江御息所歌合』(『新編国歌大観』解題、杉谷寿郎氏によれば、開催時期は延長八年(九三〇)以前)の「いづれをかえだともわかむあをやぎのはなもひとつにあさみどりなる」(二・やなぎ)という歌に見られ、これが『新編国歌大観』における初出例と見られる。平安期には、「あさ緑花もひとつにかすみつつおぼろに見ゆる春の夜の月」(更級日記・六三・作者、後に『新古今集』春歌上、五六番に採録)という例が他に見えるのみで、用例は極めて少ない。『更級日記』所載歌が、春の情景を「あさみどり」という語を用いて詠んでいる点、『近江御息所歌合』歌と共通し、『古今六帖』の当該歌とは一線を画す。

「いづれを分きてをらん」という表現類型には、まず、「雪ふれば木ごとくに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし」(冬・三三七・きの

ともりの・ゆきのふりけるを見てよめる)という『古今集』歌が挙げられる。『古今六帖』の当該歌が、この下句の表現を踏まえた可能性もあらう。雪中の白梅を詠んだ歌の例は、他に、「いづれをかわきてをらましむめのはなえだもたわわにふれるしらゆき」(躬恒集・三七一)がある。また、前掲『清正集』歌は、月影にまがう卯の花を詠み、当該歌同様、月影が照らす白菊を詠んだ歌に、『大式三位集』の「いづれをかわきてをらまし月影にしもおきそふるしらぎくの花」(二三・後朱雀院の宮と申しし比、なしつぼのみなみおもての菊御覧ずるに、月いとおもしろし)という歌がある。なお、「いづれをかわきてをらましやまざくらこころうつらぬ枝しなければ」(輔親集・五五・三月ばかりに、花みるに)、「いづれをかわきてをらまし山里の垣ねつづきに咲ける卯花」(有吉保氏蔵匡房集・三二・卯花連垣)といった例は、たくさんの花の中から手折る花を決めかねているものである。

三七五七(きく)

【本文】

きくならぬきくこそ我はおもほゆれ(る)きみにあひつぐ人しなれば

【校異】 ○おもほゆるーおもほゆれ(松・江・林・宮・紀・黒・寛) おもほゆる(和)

【語釈】 ○きくならぬきく「菊」から同音の動詞「聞く」を導く。 ○おもほゆれ 「おもほゆ」は、自然と思われるの意。今ここにはいない、離れた恋人を慕う意。底本は連体形「おもほゆる」であるが、係助詞「こそ」を受けるため、已然形に本文を校訂した。 ○きみにあひつぐ人「あひ」は「あふ」で釣り合う。「つぐ」は次に位置する、代わりになる。

あなたの身代わりになるような恋しい人。和歌の用例としては極めて稀である。

【通釈】

同じ「きく」といっても、「菊」の花ではなく、他ならぬあなたのうわさを「聞く」と、私は自然とあなたのことを思うよ。あなたほど恋しい人はいないので。

【他出】なし

【考察】

「きくならぬきく」は、和歌の表現として類例は見当たらないが、「語釈」でも述べたように、「菊」から同音の「聞く」を連想した表現と見た。「菊」と「聞く」とが同音であることから表現技巧として用いられた例は、「おとにのみきくの白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし」(古今集・恋一・四七〇・素性法師・題しらず)に見られる掛詞など、枚挙に暇がない。また、「きくならでとへともきみはおもふらんかくなつかしくをるにつけても」(大式高遠集・七〇・返し)という歌は、宮中で女房たちが菊を賞美している時に詠まれたもの。「菊」と「聞く」とを掛け、ここではさらに、「聞く」だけではなく「訪へ」と表現を展開している(私家集注釈叢刊17『大式高遠集注釈』中川博夫著、貴重本刊行会、平成二十二年五月)九七・九八頁参照)。当該歌と、とくに上句の言い回しが類似している点には、留意しておきたい。

「人しなければ」を結句に用いた例は、勅撰集においても『古今集』から見られ、「春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなければ」(春下・八八・一本大伴くろぬし・題しらず)、「わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなければ」(冬・三三二・読人しらず・

読人しらず)という歌がある。また、私家集にも、「涙河もくづおほくやながれ出づるせぜうちらふ人しなければ」(深養父集・三八)、「むらさきのいろにつけてもねをぞなくきてもみゆべき人しなければ」(一条撰政御集・四七・かへし)、「身をよせんかたもおもへばなかりけりこびをいと人しなければ」(為頼集・三四・このころ、今上の宮、春宮などに、人々まありつかうまつるとききて)といった例が見え、さらに歌合にも、「ゆふぐれはをりこそまされむめのはなかをししのぶるひとしなければ」(蔵人所歌合〈天曆十一年〉・三・よただ・天曆十一年二月蔵人所の衆ゆふぐれといふことをだいにてあはず 左勝)という歌が見出せる。なお、『伊勢物語』の「思ふこといはでぞただにやみぬべき我とひとしき人しなければ」(第二百四段・二〇八・男)という歌は、下句の構造が当該歌に酷似する。あるいはこの歌から、当該歌は下句の表現の発想を得たか。

三七六四(きく)

【本文】

にほひけんさかりはみねどきくのはな名残をしくもおもほゆるかな

【校異】 ○おもほゆるかな―おもほゆる□□(和) おもほゆる(宮)

【語釈】 ○にほひけんさかり 「にほふ」は、花がつややかに美しく咲き

誇る意。「けん」は過去推量。かつて美しく咲き誇っていたであろう花

盛り。

【通釈】

照り映えていたであろう美しさの盛りは見えていないけれど、菊の花は、名残惜しく思われるなあ。

【他出】なし

【考察】

「にほふ」菊を詠んだ歌は、勅撰集に、「秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬわが身を」（古今集・秋下・二七六・つらゆき・世中のはかなきことを思ひけるをりにきくの花を見てよみける）、「いろかはる秋のきくをばひととせにふたたびにほふ花とこそ見れ」（古今集・秋下・二七八・よみ人しらず・これさだのみこの家の歌合のうた）、「名にしおへばなが月ごとに君がためかきねの菊はにほへとぞ思ふ」（後撰集・秋下・三九八・よみ人も・題しらず）、「旧里をわかれてさける菊の花たびながらこそにほふべらなれ」（後撰集・秋下・三九九・ほかのきくをうつしうゑて）、「何に菊色そめかへしにほふらん花もてはやす君もことなく」（後撰集・秋下・四〇〇・をとこのひさしうまでござりければ）などの例が見え、また私家集にも、「咲残る菊には水もながれねど秋ふかくこそにほふべらなれ」（貫之集・四一九・菊）、「色ふかくにほふきくかなあはれなるをりにをりける花にやあるらん」（三条右大臣集〈定方〉・一三・みかどの御かへし）、「やまざとにほふを見ればきくの花たきどのまがきおもひこそやれ」（恵慶集・一二七・あるやうごとなきところより、きくのうつろへるを、いだしたまへれば）といった例がある。

また、菊の「さかり」は、「きくの花今日をまつとてきのふおきしつゆさへさえずえのさかりなり」（躬恒集・一六・きぎくのこれり）、「あきすぎてはなざかりなるきくのはないろにたぐひてあきやかへれる」（内裏菊合〈延喜十三年〉・三・季繩）といった歌に詠まれる。また、『元輔集』には、「きくの花さかりの色のわがみにはしろくなるなどわびしからら

ん」（一〇三・菊の花いとおもしろくさきたるにつけて、ときふんがよみて侍り）、「露のわくよをぞうらむる菊の花さかりの色のひとりならば」（二〇四・返し、かくてつかはしし）、「我が宿のかきねの菊の花さかりまだうつろはぬ程にきてみよ」（一六五・はべりし所にきくの花のさきたるころ、山里なる所にまからんとて人につかはしし）という三首の歌があり、物語にも、「あさ露にさかりのきくををりてみるかざしよりこそみよまさらめ」（宇津保物語・ふきあげの下・三八七・源氏〈涼〉）といった歌が見出せる。

なお、当該歌と酷似した表現をもつ同時代の作として、「さくらばなにほふなごりにおほかたのはるさへをしくおもほゆるかな」（後拾遺集・春上・九六・大中臣能宣朝臣・花をしむ心をよめる）という能宣の歌がある。桜花を詠んでおり、当該歌の菊花とは異なるが、「にほふ」「名残」「をしく（も）おもほゆるかな」という語句が共通する。春と秋という点で対照をなしており、両者に表現上の関連性を見て取ることができるとする。

三七七〇（きちかう）

【本文】

あきのつきちかうてらすとみえつるはつゆにうつろふ光なりけり

【校異】 ○つゆに—露の（和・宮）

【語釈】 ○きちかう 桔梗。秋の七草の一つ。初句と第二句「あきのつきちかうてらすと」に物名として詠み込まれる。 ○うつろふ 光や影が他の物の上に現れている。反映する。反射する。

【通釈】

秋の月が近くで照らしているように見えたのは、露に映る月の光だったのだ。

【他出】なし

【考察】

「きちかう」の歌といえは、『古今集』の「秋ちかうのはなりにけり白露のおけるくさばも色かはりゆく」(物名・四四〇・ともりの・きちかうの花)が、まず想起されよう。その後も、「しらつゆのおけるくさ葉に風すずしあかつきちかうなりやしぬらむ」(元真集・一六一・桔梗)、「秋ちかうなるもしられず夏ののにしげる草葉とふかき思ひは」(村上天皇御集・一六・六月のつごもりに給へりける御返しを桔梗につけて、秋ちかう野は成りにけり、人の心も、ときこえ給へりければ)、「あだ人のまがきちかうな花うゑそにほひもあへず折りつくしけり」(拾遺集・物名・三六三・よみ人しらず・きちかう)の他、延長五年(九二七)開催かと言われる『東院前裁合』にも、「ゆめのみもかよへどあらぬありきぢかうつつにいかでみるよしもがな」(二一・きちかう)といった例が見える。『古今集』歌では、「あきちかうのはなりにけり」に「きちかうのはな」を隠すが、この「あきちかう」の部分をそのまま踏まえたのが『村上天皇御集』の例。『元真集』では「あかつきちかう」に、また、『拾遺集』では「まがきちかう」に、それぞれ「きちかう」が隠されており、表現の工夫が看取される。「語釈」で触れたように、当該歌が「あきのつきちかう」に「きちかう」を隠すのも、その一つであろう。なお、前掲『村上天皇御集』のように、桔梗につけて歌を贈る場合もあり、「たのみせばをさなからましことのははかりにけりなきちかうのはな」(元良親王集・七九・こと女にもの給ふとききて、きちかうにつけて)と

いう物名ではない歌も、全く見いだせないわけではない。

当該歌では、「きちかう」を物名で詠む伝統を踏まえながら、「あきのつき」「つゆ」とともに詠むことにより、秋の情景を表現している。月の光を反射してあたり一面に輝く露は、あるいは桔梗に置いたものと見るべきか。

「みえつるは……なりけり」という表現は、「吹く風の色のちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり」(古今集・秋下・二九〇)、「白雲のおりゐる山とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり」(後撰集・冬・四八四・よみ人しらず・題しらず)、「梅の花匂の深く見えつるは春の隣のちかきなりけり」(拾遺集・雑秋・一一五六・三統元夏・西なるとなりにすみて、かくちかどなりにありけることなどいひおこせ侍りて)などがあり、『古今六帖』成立時までの用例も少なくない。

なお、「あきの月西にあるかと思えつるはふけゆくよはの影にぞ有りける」(拾遺集・秋・一七三・源景明・廉義公の家のかみゑに、秋の月おもしろき池ある家ある所)は、秋の月が池の面に映っているのを、西に傾いた夜半の月と見間違ったというもの。露に反射した月の光を、月が近くで照らすかと思間違ったという当該歌の内容と、一脈通じるものがある。

三七七二(りうたん)

【本文】

花しあらばかづきてをらん秋風になみたちかへりうたむなかにも

【校異】 ○うたふーうたふ(むイ)(紀)

【語釈】 ○花しあらば 「し」は間投助詞。「あらば」は「あり」の未然

つらゆき

形に接続助詞「ば」の付いた順接の仮定条件。あるならば。○かづき
て「かづく」は水の中に潜る意。○なみたちかへりうたふ「たちか
へりうたむ」に「りうたむ」（竜胆）を隠す。諸本「りうたふ」に作る
が、本文を校訂した（『考察』参照）。竜胆は、秋、青紫色の花を開くり
ンドウ科の多年草。「たちかへり」は、繰り返し、ひっきりなしにの意
で、「波が」立ち」を掛ける。「うたむ」の「うつ」は、波が強こうち
つける意。

【通釈】

花があるならば、水の中に潜って手折ろう。秋風が吹き、波が立っ
て、繰り返し強こうちつけるであろう、そんな中でも。

【他出】なし

【考察】

「りうたむ」の物名歌は、「りうたむのはな」を詠み込んだ、「わがや
どの花ふみしだくとりうたむのはな」を詠み込んだ（古今集・
物名・四四二・とのり）をはじめとして、延長五年（九二七）の開催
かといわれる『東院前裁合』の「かはのうへにけふよりうたむあじろに
はまづもみぢばやよらんとすらむ」（一九・左 りんだう）という歌や、
「かぜさむみなくなるのこゑによりうたむころもまづやからまし」（
伊勢集・八九・りむだう）などが見出せる。いずれも「りうたむ」の
「うたむ」の部分は「打たむ」という語句に隠されている。当該歌でも
「波立ち返り打たむ」という本文と見た。諸本「うたふ」と表記するの
は、ハ行点呼音が一般化した後のことか。なお、夙に『校證古今歌六帖』
には「うたふにてはりうたむといふことかくれす必うたむなるへし」と
あり、『古今和歌六帖標注』も「うたふ」と指摘している。（「エ」は狩

谷掖斎所蔵本を指す。）また、紀州藩文庫蔵田林義信氏旧蔵本の「むい」
という書き入れにも注意しておきたい。

「花しあらば」という歌句は、「花しあらば何かははるのをしからんく
るともけふはなげかざらまし」（後撰集・春下・一四四・よみ人しらす・
やよひのつごもり）、「はなしあらば春もなにかはをしからむくれぬとこ
そはけふはみましか」（躬恒集・三八七）、「やまがくれかぜにしられぬ
花しあらばはるはすぐともをりてながめむ」（好忠集・八〇・三月中）と
いった用例がある。中でも『好忠集』歌の、もし花があるならば手折っ
て賞美しようという発想は、当該歌に共通するところである。

なお、当該歌の「花」からは、「草も木も色かはれどもわたつうみの
浪の花にぞ秋なかりける」（古今集・秋上・二五〇・文屋やすひで・こ
れさだのみこの家の歌合のうた）という歌にも見える「浪の花」が連想
される。

「かづく」と「なみ」の組み合わせは、『古今集』に一首、「かづけ
ども浪のなかにはさぐられで風吹くごとくにうきしづむたま」（物名・
四二七・つらゆき・かにはさぐら）という歌がある他、「わたつみのそ
このありかはしりながらかづきていらん浪のまぞなき」（後撰集・恋二・
六五五・藤原兼茂朝臣・あり所はしりながら、えあふまじかりける人に
つかはしける）など、『後撰集』に五例見出されるが、その後、八代集
においては用例がない。

「なみたちかへ（り）」の例は、「秋風の吹きしく松は山ながら浪立帰
るおとぞきこゆる」（後撰集・秋上・二六四・よみ人しらす・題しらす）
がある。なお、『後撰集』には、「あきの海にうつれる月を立ちかへり浪
はあらへど色もかはらず」（秋中・三三二・ふかやぶ・秋歌としてよめる）

という類例もある。

三七七三(りうたん)

【本文】

伊勢

色ふかきつゆのかぎりうたむれどもむらさきふかき秋の花かな

【校異】

○つゆ―つむゆ(米)(宮)

【語釈】 ○つゆのかぎりうたむれども 「かぎりうたむれども」に「りうたん」を隠す。「かぎり」は、ある範囲内にあるものすべて、あるだけ全部の意。第二句末尾の「う」は、「得」(自分のものにする、獲得する意)か。「りうたん」を隠すために、多少無理な表現になっている点は否めない。「た(溜)むる」は、(露を)一箇所に集める意。

【通釈】

竜胆に置いて色濃く染まった露を、あるだけ全部自分のものにして、一身に集めているけれど、それにしても竜胆は、紫色の濃い秋の花だなあ。

【他出】 なし

【考察】

『本院左大臣家歌合』(藤原時平主催)に、「した草の花をみつればむらさきに秋さへふかくなりけるかな」(二〇・りむだう)という歌がある。当該歌のように物名歌ではないが、竜胆の花の濃い紫色に秋の深まりを見出している点が共通している。露は草木の色を染めるものであり、同歌合には、「あきののにいろなきつゆはおきしかどわかむらさきに花はそみけり」(しをに・一八)という歌もある。また、「しばしこそつゆふかからぬいろならめにしにさすえはあかくみえなむ」(女四宮歌

合・二五・もちきのあそん・はぎ、つゆをうすみのかへし)は、天祿三年(九七二)八月の詠で、露が次第に萩の色を染めていくさまを詠んだ例。当該歌のように、露が置くことで、花の色がより濃く照り映えるさまを詠んだ歌には、「はかなくてきゆとこそみれ色ふかくおきにほはせる萩のうへの露」(大式高遠集・一四〇・はぎの露)がある。

「つゆのかぎり」という表現は、『新編国歌大観』を検しても、当該歌以前に用例は見当たらない。後世には、「きえやすき露のかぎりをたづぬればあさぢがはらの秋のゆふ暮」(明日香井和歌集・六八三・浅茅)などがあるが、例は稀少である。

ところで、紫色の秋の花としてまず挙げられるのは、萩であろう。「紫の雲とぞみゆる月影に水のおも照すきしの秋はぎ」(兼盛集・七八・みづのほとりの花)、「こむらさきたがそでかけし衣ぞと見ゆるは秋のはぎなりけり」(恵慶法師集・九四・はぎ)といった例がある。だが、当該歌の「むらさきふかき秋の花」は、竜胆を指すと見てよからう。

なお、「秋の花」の色濃く照り映える情景は、「かはぎりはけふはなたちそきしの上にいるこくにほふ秋のはなみむ」(能宣集・三八一・貞元二年八月十六日の夜、御院にて左大臣の、前栽いけのほとりにうゑて、人によませ侍りし、岸辺秋花)といった歌に見出すことができる。

三七七五(しをに)

【本文】

秋ののくさばを人おもをりきしをにしきのごともみえわたるかな

【校異】 なし

【語釈】

○くさば 草の葉。 ○をりきしをにしきのごとも 「をりきし

をにしき」に「しをに」を隠す。紫苑は、秋、淡紫色の頭花を多数咲かせるキク科の多年草。「をりき」は「折り来」で、(草葉を)手折つて来るの意。「織(お)り着る」(織つて着物にして着る)を掛ける。「をり」と「おり」では、『古今六帖』成立時には音が異なると考えられるが、近接した音をもつ語に着目した表現か。「し」は過去。○にしきのごともみえわたる 紅葉が一面に錦のように見える。「わたる」は空間的な広がりを表す。

【通釈】

秋の野の草葉を人が手折つて来たのだが、まるで織つて着た錦のように、一面に見えるなあ。

【他出】なし

【考察】

「秋のの」と「くさば」との組み合わせは、露とともに詠まれることが多い。いま、煩を厭わず列举すると、「あきののにかななるつゆのおきつめばちぢの草ばの色かはるらん」(後撰集・秋下・三七〇・よみ人しらず・題しらず)、「秋の野の草葉もわけぬわが袖のつゆけくのみもなりまさるかな」(拾遺集・恋三・八三二・よみ人しらず・題しらず)という勅撰集歌にも見え、また、私家集にも、「秋のののうつろふみればつれもなくかれにし人は草葉とぞみる」(貫之集・六〇六)、「秋ののの草葉もわけぬ我が袖のものおもふなへに露けかるらん」(貫之集・六一七)、「秋のののくさばを見ればおしなべてうきみのほどにおける白露」(元真集・二二四)、「わするらんかれなはてそもあきのののくさばにつゆのかかるほどだに」(扇宮女御集・一五〇・くだりたまはむ秋のすゑに、おなじ宮、又)、「あきのののくさばもわけぬわがそでのあやし

やなどてつゆけかるらん」(一条撰政御集・一四三・また、おなじ人に)、「たがぬけるたまにかあるらんあきののの草ばをよきずおけるしら露」(好忠集・二〇〇・七月中)などの歌がある。歌合としては、「あきのののくさばのつゆにそほちつなくむしのねにわれもおとらず」(河原院歌合・応和二年(九六二)・七・夜虫吟叢 左)という歌を見出すことができる。当該歌に「露」の語は用いられないが、秋の野の草葉の紅葉に着目している点は、前掲『後撰集』三七〇番歌の内容に重なる。

「折り来」の用例は、「ふるさとのみちをりくるたび人はにしきをきてやひなはこゆらん」(延喜御集・二二・あるくらひと、かうぶり給はりて、おやのはかをがみに信濃へなむまかるときこしめして、御ぞ、なほしたまはせけるに、御使、あふさかになん、おひつきたりける)、「花をのみをりくるからにちりまがふにほひあかずもおもほゆるかな」(千里集・四・花枝攀処欲分分)、「はなかとてゆきのまにまにをりくれどかつきえかへりてにもたまらず」(順集・五七・双六番のうた、これもありただがよみはじめたるに、よみつぐ)といった例がある。とくに『延喜御集』の例は、紅葉の錦を着るといふ発想や表現が当該歌に相通じるものがある。なお、『万葉集』には、「たをりきて(手折来而)」という句が三例(巻八、一五九〇(一五八六)・一五九二(一五八八)・一五九三(一五八九)番)あるが、平安期にはまず用いられない。

「織り着る」という語は、夙に『万葉集』に用例が見られる。「……勝鹿の 真間の手児名が 麻衣に 青衿着け ひとさ麻を 裳には織服(オリキテ)……」(巻九・一八一・一八〇七)、「君に逢はず 久しき時ゆ 織服(オリキタル) 白たへ衣 垢付くまでに」(万葉集・巻十二・二〇三三・二〇二八)という歌であるが、後者は「おるはたの」など

の異訓もある。また、「雁之声丹 カリガネニ クダマクオトノ 管子纏於砥之 ヨヲサムミ 夜緒寒美 ハシノオリキル 虫之織服 コロモツカ 衣緒曾仮」(新撰万葉集・卷之上・一一五)、「ふぢ衣おりきるいは水なれやぬれはまされどかわくよもなし」(貫之集・七八〇)という歌や、延喜十六年(九一六)七月七日に催された「あかなくにわかれにしかばたなばたのおりきしそではいまやぬるらむ」(亭子院殿上人歌合・一九・左持)といった歌合の例も見える。『古今六帖』の「秋風にちるもみぢばはをみなへしやどにおりきるにしきなりけり」(第五・三五二六・つらゆきにしき)という例もあるが、この歌は、『後撰集』(秋下・四一〇・よみ人しらず・題しらず)では、第四句に「やどにおりしく」という異同がある。このように、当該語は、奈良時代から平安時代にかけて用いられているが、歌語として定着するには至らなかったと推察される。

「にしきのごと」という歌句には、「秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なきつゆはそめじと思ふに」(後撰集・秋下・三六九・よみ人しらず・題しらず)という例がある。この歌は、『古今六帖』にも載る(第二・一一四七・もとかた・秋、結句「おかじとぞ思ふ」)。

なお、源英明の漢詩に、「花飛如錦幾濃粧(はなとんでにしきのごとしいくばくのちようさうぞ) 織着春風未豊箱(おるものははるのかぜいまだはこにたたまず)」(和漢朗詠集・卷上・一二〇・春)という作がある。「錦」を「織着」という漢字表記は、当該歌の発想にあるいは影響を与えたか。ただし、「着」の字には「者」の異文がある。

最後に、「みえわたるかな」の類例として、「秋の月ひかりさやけみもみぢばのおつる影さへ見えわたるかな」(後撰集・秋下・四三四・つらゆき・延喜御時、秋歌めしありければたてまつりける)を挙げておく。

三七七六(しをに)

【本文】

ちりぬともみつる色をばわすれじをにはかにうつる花の色かも

【校異】 ○わすれしを―わすれらし(朱)を(宮)

【語釈】 ○みつる色 「み」は動詞「見る」の連用形で、目にとめる意。「つる」は完了の助動詞。「色」は「花の色」を指す。 ○わすれじをにはかに「わすれじをにはかに」に「しをに」を隠す。「にはかに」は、物事が急に起こるさま。だしぬけに。突然。 ○うつる 褪色する。色がさめる。

【通釈】

たとえ散ってしまったても、かつて見た色を忘れまいと思っていたのに、急に褪せる花の色だなあ。

【他出】 なし

【考察】

「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(古今集・春下・一一三・小野小町・題しらず)という有名歌にも見られるように、「花の色」が褪せていく感慨を詠んだ歌は少なくない。この小町歌は、褪色する「花の色」に自らの容色の衰えを重ねるが、「としをへて花のいろだにうつらずと人のこころをたのむべしやは」(敦忠集・七六・また、宮)という歌は、人の心の頼みがたさを重ねて詠んでいる。「ちりぬとも……わすれ(じ)」という表現は、「みな人の待ちし卯の花散りぬとも鳴くほととぎすわれ忘れめや」(万葉集・卷八・一四八二・一四八六)という先行例が見られる。「ちりぬとも」の例は、

「ちりぬともかをだにのこせ梅花こひしき時のおもひいでにせむ」(古今集・春上・四八・よみ人しらず・題しらず)、「ちりぬともありとたのまむさくらばなはるはすぎぬとわれにきかすな」(亭子院歌合・一二)、「散りぬともあだにしもみじ藤花行さきとほく松にさければ」(貫之集・二二五)といった歌が見えるが、『万葉集』では、「あをやなぎ梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし」(巻五・八二一・八二五・笠沙弥)のように、「散りぬともよし」の例が目立つ(巻六、一〇一一～一〇一六)番、巻八、一六五六(一六六〇)番、巻十、三三二八(三三三三)番)。

三七七八(しをに)

【本文】

つらゆき

さきはてて今はあらじと思ひしをにはか(近)くれてもにほひけるかな
【校異】 ○にはかにくれても―にはかかれても(永・松・江・林・紀・黒・寛)をにかくれても(和)にかくれても(宮)※「は(朱)」は、本行「か」の右下に書き入れた文字を摺り消して位置が修正されている。○にはほひけるかな―におひけるかな(紀)

【語釈】○思ひしをにはかかれても 「思ひしをには」に「しをに」を隠す。「にはかかれても」の「に」は「丹」で、赤い色の意を見た。紫苑の花は淡紫色であり、はつきりと目に映る赤色ではないことをいうか。○にはほひけるかな 「にほふ」は、つややかに美しく咲く意。

【通釈】

すっかり咲き終わって、今はもうあるまいと思っていたのに、紫苑の花は、映える赤色は見えないが、美しく咲き誇っているなあ。

【他出】なし

【考察】

「しをに」は、周知のとおり、『古今集』に「ふりはへていざふるさとの花見むとこしをにほひぞうつるひにける」(四四一・よみ人しらず・しをに)というように、物名歌として詠まれる歌語である。当該歌も同様の物名歌であるが、花の色の衰えを詠む『古今集』歌に対し、いまだ続く花の美しさを詠んでいる。

和歌における「咲き果つ」の用例は、『新編国歌大観』を検する限り、当該歌が早いものである。後には、「さきはてぬこずおほかるやどなればはなのほひもひさしくやみむ」(範永集・一六・左大臣どのの中将におはせしときに、三条院にて、はないまだあまねからずといふころを)、「さきはてずちりにし花のわかれより春のやよひはうらみはててき」(なき人のおもひに山寺にまかれりけるに花のちりければ) (玉葉集・雑四・三三九四・権大納言長家)、「昨日までまだしき花も開きはてて今朝身にしむは春の山風」(拾玉集・四〇三一・春山朝)、「たづねきてひかずへにけり山ざくらおくれし花のさきはつるまで」(栴葉集・春・六一・法印尋恵・題不知)などの歌があるが、例は少ない。

一方、第二句「今はあらじ」の例は、同じ『古今六帖』の、第一帖「あらし」題に、「山里に住みにし日よりとふ人もいまはあらしの風ぞわびしき」(四二九)、「我を君とふやとふやと松風のいまはあらしとなるぞかなしき」(四三四)、「とふ人もいまはあらしの風はやくわすれはてにし人にやはあらぬ」(四三五)といった三首の出典未詳歌が見える。いづれも「あらじ」は「嵐」との掛詞になっており、同様の例は、「ながきよにすだきし虫をいとひしにいまはあらしのおとぞはげしき」(好忠

集・二八六・はじめの冬 十月)、「とふ人もいまはあらしの山風に人まつむしのこゑぞきこゆる」(拾遺抄・秋・一三二・読人不知・題不知)がある。『古今六帖』成立時には掛詞として用いる例が目立つが、当該歌はそれらとは一線を画す。

「にほひけるかな」という歌句は、「皆人のこころにまがふふぢばかまむべ色ふかく匂ひけるかな」(続後拾遺集・秋上・二六八・平城天皇御製・御返し)、「いそのかみふるさとにさく花なれど昔ながらににほひけるかな」(風雅集・春中・一六九・中務・桜をよめる)、「ゆかりともきこえぬものを款冬のかはづが声ににほひけるかな」(貫之集・二五四・京極の権中納言の屏風のれうの歌廿首)といった歌に見られ、藤袴や桜、款冬などに用いられた例がある。

三七七九(しをに)

【本文】

おなじ

きくもなほさきいでぬればことはなほそれにあらじをにほひけるかな
【校異】○さきいでぬれば―^{ok}いてぬれば(永) ○ことはなほ―ことはなを(和・宮) ことはなを(林)

【語釈】○きくもなほ 「聞く」に「菊」を掛ける。三七七七番「考察」参照。
○さきいでぬれば 「さきいづ」は、花が咲き始める、咲き初めるの意であるが、人目につくほど派手に咲く意味合いを含む(「考察」参照)。

○ことはな ほかの花。別の花。ここでは物名「しをに」を暗示するか。○それにあらじをにほひけるかな 「あらじをにほひける」に「しをに」を隠す。「それ」は菊を指す。「にほふ」は、菊の明るく映えた色が、他の花に照り映え、染まる意。

【通釈】

聞くところによるとやはり、菊も人目に付くほど咲き始めたので、別の花(紫苑)は、それ(菊)ではあるまいが、同じように照り映えていゝなあ。

【他出】なし

【考察】

「さきいづ」の例は、夙に『万葉集』に、「みやじろのすかへに立てるかほが花な咲き出でそねこめてしのはむ」(巻十四、三五九七・三五七五)という歌があり、「語釈」でも触れたとおり、花が目立って咲き初める含意があると見た。平安中期においては、「浦ごとに咲出づる浪の花みれば海には春もくれぬなりけり」(貫之集・二〇五・三条右大臣屏風のうた)、「老木ぞと人は見るともいかでなほ花咲き出でて君にみなれむ」(落窪物語・三〇・翁(典葉の助))といった例があるが、それほど多くはない。また、「ことはな」という語は、『新編国歌大観』に拠っても用例がない。「竜胆、枝さしなどむつかしげなれど、こと花はみな霜枯れたれど、いと花やかなる色合ひにてさし出でたる、いとをかし」(枕草子・草の花は)、「閨のつま近き紅梅の色も香も変はらぬを、『春や昔の』と、こと花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや」(源氏物語・手習)といった散文作品に、かろうじて見出される程度である。

「……にあらじを」という句も、用例は稀少である。『古今六帖』と同時代の用例は『新編国歌大観』を検するかぎり見当たらず、後世に、「おもふことさらにあらじを月かげのみなくれごとにいづる世ならば」(重家集・六四・大殿より月御歌三十五首下し給ひて、此定によりてたてま

つれとおほせられしかば」といった例を挙げるにとどまる。

結句「にほひけるかな」については、三七七八番「考察」を参照されたい。

三七八一（しをに）

【本文】

むらさきの花ゆひしつとつけしをにおもひはふかくむすびこめてき

【校異】 ○むすひこめてき―結びこめ（空白）き（紀）

【語釈】 ○むらさきの花ゆひ 紫色の元結（髻を結び束ねる紐）を、紫苑の花を結んださまに喩えた表現と見た。 ○つけしをに 「つけしをに」に「しをに」を隠す。「を」は紐。 ○むすびこめてき 「むすびこむ」は、緒を結んで中に封じ込める、中につなぎこめる意。「てき」は完了の助動詞「つ」の連用形に過去の助動詞「き」がついたもの。

【通釈】

紫の紫苑の花を結びつけたとでもいうように付けた元結に、私の思いを深く結びこめた。

【他出】 なし

【考察】

紫苑の花の紫が、元結の色と共通することから、元服の歌と解した。「元結」を詠んだ歌といえは、『古今集』の「君こずはねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも」（恋四・六九三・よみ人しらず・題しらず）という歌がまず挙げられよう。他にも、「こむらさききみがむすびしもとゆひのちりやうちはらふほどまでやこぬ」（元真集・三三二・ひさしくこずとてふすべて、こぬひとに）、「けふむすぶはつもとゆひのこむらさきいろものいろのためしなるべし」（能宣集・一〇一・あるひ

とのかうぶりする所にまかりて）という例がある。中でも『能宣集』の歌は、「初元結」（元服）の時の詠であるが、同様の例が『源氏物語』桐壺巻に見出せる。すなわち、光源氏の元服の際に詠まれた、桐壺院と左大臣の歌である。「いとさなきはつもとゆひに長き世をちぎる心は結びこめつや」（八・桐壺院）、「結びつる心も深きもとゆひに濃きむらさきの色しあせずは」（九・左大臣）の二首で、とくに前者の結句には、当該歌と同じ「結びこむ」という語が用いられている。また、後者の「結びつる心も深き」という表現は、当該歌の下旬に通じるものがある。元服時の詠歌の表現類型として、これらの『源氏物語』の例を参看すると、当該歌も、元服時に将来を誓った歌と考えられる。ただし、「花ゆひ」の語は、『新編国歌大観』を検しても例がない。

附記

本稿は、歌語研究会（同志社大学文化情報学部学生研究会）の活動の成果であり、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」（課題番号22500236、平成二十一～二十四年度）における研究の一部である。

穂満（三七三六番）、浅井（三七七〇番）、青木（三七七二・三七七六番）、桐谷（三七七三・三七七八番）、福田（三七五七・三七六四・三七七五・三七七九・三七八一番）が分担執筆し、さらに福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田

正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.2.00を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・鳥原図書館嶋原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖(5) 菊〜紫苑―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに()を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

- 第一卷 1古今和歌集〜4後拾遺和歌集
- 第二卷 1万葉集〜6和漢朗詠集
- 第三卷 1人丸集〜81赤染衛門集
- 第五卷 1民部卿家歌合〜61源大納言家歌合長久二年、253紀師匠曲水宴和歌〜269九品和歌、281歌経標式(真本)〜285新撰髓腦290新撰和歌髓腦、347古事記〜353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記〜393和泉式部日記、414竹取物語〜420落窪物語
- 第六卷 2秋萩集〜5麗花集

第七卷 1奈良帝御集〜36肥後集
3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数―通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉3―19貫之355 『新編国歌大観』第三卷19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、〈参考〉と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として〈未詳〉と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

- 3730 きく
ぬれてほす山路のきくの露の間にいかで千とせを我はへにけん
- 1―1古今273 「いつかちとせを」、2―3新撰和94 「いつかちとせを」、5―2寛平17 「いつかちとせを」、3―9素性51 「いかでかちよを」、2―6和漢朗553 「いかでかわれは」「ちよをへぬらん」
- 3731 うゑしうゑば秋なきときやさかざらん花こそちらめねさへかれめや(みちひら)
- 1―1古今268、3―6業平6、5―415伊勢語97、5―416大和272、7―2業平68
3732 ひさかたの雲のうへにてみるきくはあまつ星とぞあやまたれける(としゆき)
- 1―1古今269、2―6和漢朗272、3―8敏行11、5―266三十人66、5―267

3733 秋風のふきあげにたてるしらぎくは花かあらぬかなみのよするか

(すがはらのおとど)

1-1古今272、5-2寛平菊8、5-1264和十種39、3-9素性65「ふきあげのまの」「はなのさけるか」

3734 故郷をわかれてさける菊の花たひらかにこそほふべらなれ(つらゆき)

1-2後撰399「たびながらこそ」

3735 さき初めしやどのかはればきくの花いろさへにこそうつろひにけれ(おなじ)

1-1古今280「やどしかはれば」

3736 月影もはなもひとつにみゆるよはいづれを分きてをらんとぞ思ふ(おなじ)

〈未詳〉

3737 いろそむる物ならねども月影にうつれるやどのしらぎくの花(つらゆき)

3-19貫之124「色ぞめぬ」「月影の」

3738 うつろふとみゆるものからきくのはなさけりしえだぞかはらざりける

5-13内裏菊11

3739 いづれをかはなとはわかななが月の有明の月にまがふ白ぎく

3-19貫之102

3740 うすくこく色ぞみえけるきくのはな露や心をわきておくらん(つらゆき)

1-4後拾遺353、3-19貫之158「色もみえける」

3741 おくしものそめまどはせるきくのはないづれかもとの色にはあるらん

3-19貫之236「染めまがはせる」「いづれをもとの」「色とかはみん」

3742 みづにさへながれてふかきわがやどのきくのふちとぞ成りぬべらなる(つらゆき)

き)

3-19貫之542「わがやどは」

3743 ををよりてぬくものにもか朝ごとにきくのうへなる露のしらたま

3-19貫之390「ぬくよしもがな」

3744 心あてにをらばやをらんはつしものおきまどはせる白ぎくのはな(みつね)

1-1古今277、2-3新撰和100、2-5金玉32、2-6和漢朗273、5-1264和十種38、5-1266三十人28、5-1267三十六28、5-1268深窓秘55、7-15躬恒152

3745 きくの花ときもおそきもいままに霜のおかすは色をみましや(おなじ)

3-12躬恒130「こきもうすきも」、5-13内裏菊12「こきもうすきも」、7-15躬恒173

3746 初しぐれふりそめしより菊のはななかりし枝ぞまたそはりける(同じ)

5-13内裏菊13「こかりしえだぞ」、3-12躬恒131「こかりしいろぞ」、7-15躬恒174「ながめし枝ぞ」「色まさりける」

3747 月かげにいろわきがたく白ぎくはをりてもをらぬ心ちこそすれ

3-12躬恒137「いろわきがたき」、7-15躬恒107「色わきがたき」

3748 朝ごとにつゆはおけども菊のはな人のよはひはくれずぞ有りける

3-19貫之135「秋ごとに」

3749 菊のはな千くさの色をみる人のこころさへにぞうつろひぬべき(みつね)

7-15躬恒111「見る人も」「こころをさへぞ」、3-12躬恒460「みるひとも」「のべをとのみぞ」

3750 もとよりのいろにはあれどきくのはなかたえはうつす所からかも

5-13内裏菊14、7-15躬恒175「かたえうつすと」「こころからかも」

3751 なみとのみうちこそみつれすみの江のきしに残れる白ぎくの花(ともりの)

5-13内裏菊4「うちこそみゆれ」、3-16是則解2「なみとこそ」「うちこそみゆれ」

3752 ひと本とおもひしきくをおほさはのいけの底にも誰かうえけん(ともりの)

3772 花しあらばかづきてをらん秋風になみたちかへりうたふなかにも（つらゆき）

〈未詳〉

3773 色ふかきつゆのかぎりうたむれどもむらさきふかき秋の花かな（伊勢）

〈未詳〉

3774 風さむみなくかりがねのこゑによりうたんころもまづやからまし（い勢）

3-15 伊勢集 89 「なくなるかりの」

しをに

3775 秋ののくさばを人もおりきしをにしきのごともみえわたるかな

〈未詳〉

3776 ちりぬともみつる色をばわすれじをにはかにうつる花の色かも

〈未詳〉

3777 うけたむる袖をしをにてぬきとめばなみだのたきのかずはみてまし（伊勢）

3-15 伊勢集 137 「そでをしほりて」「つらぬかば」「なみだのたまも」

3778 さきはてて今はあらじと思ひしをにはかくれてもにほひけるかな（つらゆき）

〈未詳〉

3779 さくもなほささいでぬればことはなはそれにあらじをにほひけるかな（おなじ）

〈未詳〉

3780 ふりはへていざふるさとの花みんとこしをにほひぞうつろひにける

1-1 古今 441

3781 むらさきの花ゆひしつとつけしをにおもひはふかくむすびこめてき

〈未詳〉